

子どもの攻撃性への援助に関する研究動向と課題

鹿児島純心女子大学大学院 井上 祐子

要旨

本研究は、子どもの攻撃性への援助について知見を得ることをねらいとして、子どもの攻撃性への援助に関する国内外の学術論文について、動向と課題を整理することを目的とした。学術論文の収集には、「CiNii」「ERIC」を使用した。最終的に19編の子どもの攻撃性への援助に関する学術論文において、対象、方法、内容に着目し、研究動向を整理した。19編の学術論文は、「攻撃性に関する尺度開発」「攻撃性に関わる要因」「攻撃性に対して行われる援助」に分類された。この結果、攻撃性に関わる要因として、「対人関係」「個人的なストレス」「薬物使用のリスク」「社会的アイデンティティ」「集団現象」「性別違和感」「学年段階」「家庭の子育て」「反芻」「コンピューターゲーム」「精神的暴力への曝露」「道徳的意識の欠如」「オンラインリスクの認識の低さ」「校風の悪さ」「親のサポートの少なさ」「高いピアサポート」「中学校進学における社会的能力と期待」が挙げられていた。また、攻撃性に対して行われる援助として、「葛藤解決方略の提供」「暴力的な番組の制限」「ソフトウェアツールを使用した行動支援」「対処支援プログラムの提供」「早期介入プログラム（FSS-PSV）の提供」「ソーシャルサポートの提供」「PTR-YCプロセスの提供」が挙げられていた。今後の研究課題として、①「攻撃性に関わる要因」に基づいた「攻撃性に対して行われる援助」について研究の知見を重ねること、②愛着と子どもの攻撃性の関連に着目した援助の検討、③援助者である大人を対象とした「攻撃性に対して行われる援助」に関する定量的研究の蓄積が喫緊の課題になるといえる。

キーワード：文献研究 子ども 愛着 攻撃性 援助

I 序論

1. 研究目的

社会的養護の充実を目指し、児童養護施設等の社会的養護の課題に関する検討委員会及び社会保障審議会児童部会社会的養護専門委員会（以下「社会的養護専門委員会」という）は、「社会的養護の課題と将来像」を取りまとめ、原則として、社会的養護は、家庭養護を優先するとともに、施設養護もできる限り家庭的な養育環境の形態に変えていく必要があるとした（厚生労働省 2011）。これに伴い、児童養護施設及び乳児院における小規模化及び家庭的養護の推進を実現していくために、社会的養護専門委員会は、「児童養護施設等の小規模化及び家庭的養護の推進について」を取りまとめ、各施設が定める「家庭的養護推進計画」と都道府県が定める「都道府県推進計画」に基づき、社会的養護が必要な児童を可能な限り家庭的な環境で養育することができるよう、里親等家庭での養育や施設の小規模化・地域分散化を推進するとした（厚生労働省 2012）。その

後、2016（平成 28）年の児童福祉法改正では、子どもが権利の主体であることの明確化、家庭養育優先の理念の規定、特別養子縁組による永続的解決（パーマネンシー保障）及び里親による養育を推進した（厚生労働省 2016a；厚生労働省 2016b）。この改正法の理念を具体化するために、「社会的養護の課題と将来像」に基づいて策定された都道府県等の計画は、「新しい社会的養育ビジョン」に基づき、家庭養育の実現と永続的解決（パーマネンシー保障）、施設の抜本的改革、児童相談所と一時保護所の改革、中核市・特別区児童相談所設置支援、市区町村の子ども家庭支援体制構築への支援策等を盛り込むよう、見直しが図られた（厚生労働省 2017）。

このような社会的養護の見直しが図られる中で、これらの政策を支える人的社会資源にも目を向ける必要がある。先行研究（藤岡 2009；藤岡 2013）では、子どもから職員あるいは里親への暴力が、施設崩壊、職員や里親のバーンアウト、里親の養育不調等を引き起こしてしまうことが指摘されている。こ

の子どもによる暴力について、東京都社会福祉協議会児童部会（2009）は、虐待の再現行為等から施設内での児童の暴力が増えていることを受け、児童の暴力に関する調査を行った。この結果、施設における子どもから職員への暴力（対職員暴力）について、70.2%の保育士・指導員が暴力を受けた経験があること、また、暴力行為を起こした児童の年代について、幼児22件、小学校低学年16件、小学校中学年19件、小学校高学年18件、中学生17件、高校生4件との調査結果を明らかにした（東京都社会福祉協議会児童部会2009：44-45）。虐待の再現行為等から施設内での児童の暴力が増えている一要因として、幼児期における暴力行為が見られることから、愛着も関係している可能性があると考えられる。愛着とは、保護者や特定の保育者と乳幼児の間にある相互的な絆のことであり、提唱者であるボウルビーは、2,3歳以降になると、認知能力が発達し、内的作業モデル（本当に必要な場合には、養育者を得られることが保証されているという確信・イメージ）が子どもの中に内在化され、心の拠り所となり、満足で安全な気持ちを持つことができるとした（Bowlby = 1991a: 417-419; 初塚 2010: 5）。また、ボウルビーは、愛着対象との離別と攻撃的行動の関係について言及している（Bowlby = 1991b: 272-285）。これらのボウルビーの考えを援用するならば、社会的養護を必要とする児童による暴力と関係する要因の一つとして、愛着対象との離別によって、内的作業モデルが内在化されず、攻撃性を見せる児童がいる可能性も考えられる。

これまでの愛着と攻撃性の関係に関する先行研究（下笠 2004；工藤 2006；尾崎ら 2007；工藤ら 2011；丹羽 2011；秋葉 2013；浅川ら 2013；藤岡 2013；岡田ら 2013；小西 2014；大橋 2017；Housman, et al. 2018；小寺ら 2020）のうち、社会的養護に関わる先行研究は、被虐待児のプレイセラピーにおける攻撃と依存に関する研究（下笠 2004）と、児童養護施設入所児童の攻撃性への対処支援プログラムに関する研究（藤岡 2013）のみである。社会的養護を必要とする児童による暴力に対して、現場の中で様々な試みが行われてきているが、援助技法は未だ十分に確立されているとはいえない状況が指摘さ

れている（藤岡 2009；吉村 2014）。これらの状況を受けて、ボウルビーの考えを援用し、社会的養護を必要とする児童による暴力行為の一因として、愛着対象との離別によって、内的作業モデルが内在化されず、攻撃性を見せる可能性に着目し、子どもの攻撃性への援助について先行研究を調べ、知見を得ることが喫緊の課題と考えられる。

そこで本研究では、子どもの攻撃性への援助について知見を得ることをねらいとして、子どもの攻撃性への援助に関する国内外の学術論文について、動向と課題を整理することを目的に行った。

2. 研究方法

学術論文の収集において、国内文献の検索には「CiNii」（NII 学術情報ナビゲータ [サイニィ]）、海外文献の検索にはアメリカ教育省が提供する、教育関係論文データベースである「ERIC」（Education Resources Information Center）を用いた。検索キーワードは「aggression, 攻撃性」「support, 援助」「child, 子ども」とした。なお、「ERIC」では「Peer reviewed only」「Full text available on ERIC」という検索対象指定を行った。この結果、上記のデータベースから29編の文献が抽出された。これらの文献は、以下の①～③の選定基準に従い、分析に資する文献の絞り込みを行った（文末資料1）。その選定基準は、①原著論文であること、②人が研究対象であること、③子どもの攻撃性への援助について検討していること、である。

なお、倫理的配慮として、「日本社会福祉学会 研究倫理指針 第2 指針内容 A 引用」に基づき、先行業績の検討に際しては、現著者名・文献・出版社・出版年・引用箇所を明示し、自説と他説との峻別を行った。

II 本論

1. 分析に用いた学術論文の概要

上記の基準により10編の文献（Jayalekshmi, et al. 2011；James-Burdumy, et al. 2013；Pracana, et al. 2016；Eyasu 2017；Miller, et al. 2017；Pracana, et al. 2017；Pracana, et al. 2018；Pracana, et al. 2019；Wilson, et al. 2019；

Fitzpatrick, et al. 2020) を除いた。この結果、子どもの攻撃性への援助について検討した学術論文は、19 編であった。選定した学術論文は、「対象」「方法」「内容」という側面から整理した（文末資料 2）。

これら 19 編の学術論文の対象に関する内訳は、重複しているものもあるが、小学生、中学生を対象とした文献が各 8 編であった。障害のある子ども、高校生、大学生、保護者を対象とした文献が各 2 編であった。就学前児童、児童養護施設入所児童、幼稚園教諭、小学校教諭、中学校教諭、カウンセラー、児童養護施設職員を対象とした文献が各 1 編であった。また、採用している研究方法是、定量的研究（アンケート調査）が 13 編、定性的研究が 6 編（内訳：観察調査 2 編、事例研究 2 編、面接調査 1 編、自由回答式質問紙調査 1 編）であった。さらに、研究内容として、以下のことが示されていた。

- (1) 児童期の葛藤解決方略と信頼感・攻撃性の関連に関する研究（山井ら 2003）では、攻撃性が高い子どもは、①自己と他者を信頼しているにもかかわらず、対人葛藤場面において「対決」パターンを取りやすいこと、②「怒り」感情をコントロールするスキルを教えること、③「怒り」のみならず「敵意」を持っている可能性が高いこと、④児童期に攻撃的であるという行動特徴が、思春期以降の非行、あるいは仲間からの孤立からくる抑うつ感の増大等、様々な不適応症状に関連していく可能性があることが示された。
- (2) メディア暴力への曝露と、就学前児童の攻撃的行動の相関関係に関する研究（Daly, et al. 2009）では、①暴力的な番組の量を制限すること、②子どもたちが双方向の規制支援の恩恵を受けていることが示された。
- (3) 中学生のストレスといじめの関係に関する研究（Leung, et al. 2009）では、①家族の中で女子生徒は男子生徒よりもストレスを感じることに、②男子生徒よりも女子生徒の方が社会的いじめを行っていることに、③対人関係と個人的なストレスの両方がいじめにつながる要因となることが示された。
- (4) 農村地域の青年期女性における薬物乱用

に影響を与える要因に関する研究（Renes, et al. 2009）では、攻撃的な行動を示す青年期初期の女性は、薬物使用のリスクが高いことが示された。

- (5) ソフトウェアツールを使用した行動支援の提供に関する研究（Whitby, et al. 2009）では、ソフトウェアプログラムである eKidTools を使用することによって、①自己管理スキルを獲得したこと、②ニーズを満たすために必要なサポートを獲得したことが示された。
- (6) 児童養護施設入所児童の攻撃性への対処支援プログラムに関する研究（藤岡 2013）では、①自己発現的な攻撃性、及び反応性の攻撃性に対する情動調整では、重要な人物との関係性構築が大切であること、②攻撃行動の「選択」の前に、重要な人物との心地よさ体験、重要な人物との信頼体験が出現し、攻撃性の調整が行われることが示された。
- (7) 学校における暴力行為に関する研究（Jones, et al. 2014）では、①いじめを支持または抵抗するために、子どもたちが社会的アイデンティティのプロセスに沿って特定の方法で行動すること、②いじめは集団現象であると教師が理解していることが示された。
- (8) 小学高学年・中学生用反応スタイル尺度の開発研究（村山ら 2014）では、因子分析の結果、小学高学年・中学生用反応スタイル尺度は 4 因子（「反芻」「問題解決」「思考逃避」「気晴らし」）で構成されることが示された。
- (9) 反社会的行動の防止における早期介入プログラム（FSS-PSV）に関する研究（Çolak, et al. 2015）では、①反社会的 / 問題行動は、社会的スキルにおける身体的攻撃性と機能不全を含んでいること、②教師と保護者の大多数は、反社会的 / 問題行動は家族関係に理由があること、③教師は、生徒に反社会的 / 問題行動について話し、前向きな行動に対して報酬を与えることを好むこと、④親は子どもと話すか、罰することを好むことが示された。
- (10) 小中学生における性別違和感と抑うつ・攻撃性の関連に関する研究（浜田ら 2016）では、①

性別違和感と抑うつおよび攻撃性には中程度の正の相関があること、②中学生男子において性別違和感が高い場合には、中学生女子・小学生男子・小学生女子と比較して抑うつが高いことが示された。

- (11) 小中学生におけるメンタルヘルスに対するソーシャルサポートに関する研究(村山ら 2016)では、①友人および大人からのソーシャルサポートを知覚する児童生徒ほど抑うつ症状が低いこと、②男子よりも女子でサポートと抑うつ症状の関連が強いこと、③攻撃性については、友人からのサポートは負の効果を示したが、その効果は非常に低いものであったこと、④大人からのサポートは攻撃性に有意な効果を示さなかったこと、⑤ソーシャルサポートの性差について、女子の方が男子よりも高かったこと、⑥学年の影響について、学年の上昇に伴って、友人からのサポートは増大する一方で、大人からのサポートは減少することが示された。
- (12) 小・中学生の攻撃性に関する研究(野田ら 2016)では、①攻撃性は特性-状態モデルの適合が最も良好であり、特性変数と自己回帰的な状況変数の双方が攻撃性の程度を規定していること、②攻撃性は中程度の安定性をもつこと、③攻撃性は、学年段階が上がるにつれて上昇すること、④小学校中学年頃までは攻撃性の個人差はまだそれほど安定的ではないが、思春期に移行する小学校高学年頃から中学校にかけて個人差が固定化していくことが示された。
- (13) 家庭の子育てが青年期の暴力行為に与える影響に関する研究(Nurhaeni, et al. 2016)では、家庭での厳格な子育てを受けた場合、青年期の暴力行動が低くなる傾向があることが示された。
- (14) 小学校高学年児童および中学生における情動調整方略と抑うつ・攻撃性との関連に関する研究(村山ら 2017)では、①情動調整方略と抑うつおよび攻撃性の関連については、反芻が強い児童生徒ほど抑うつと攻撃性が高いこと、②問題解決の傾向が高い児童生徒ほど抑うつと攻撃性が低いこと、③気晴らしを行う児童生徒は

ど抑うつが低いことが示された。

- (15) 幼児へのPTR-YCプロセスに関する研究(Fronapfel, et al. 2018)では、学校を拠点とするチームによって実施されたPTR-YCプロセスを示し、手順の有効性を示した。
- (16) コンピューターゲームが就学前児の発達と行動に及ぼす影響に関する研究(Ilgar, et al. 2018)では、①コンピューターゲーム依存を引き起こす、②子どもの行動に悪影響を及ぼす等を示した。
- (17) 精神的暴力への曝露に関する研究(Eskici, et al. 2019)では、①大学生の精神的暴力への曝露レベルは低いこと、②男子生徒の精神的暴力への曝露は女子生徒よりも有意に高いこと等が示された。
- (18) 教師へのいじめに対する危険因子に関する研究(Sorrentino, et al. 2019)では、女子学生では、①道徳的意識の欠如、②オンラインリスクの認識の低さ、③校風の悪さ、男子学生では、①親のサポートの少なさ、②高いピアサポート、③道徳意識の欠如、④オンラインリスクの認識の低さがリスク要因であることを示した。
- (19) 中学校進学に向けた社会的能力と期待との関連に関する研究(Röder, et al. 2020)では、①共感と攻撃性が中学校進学の認識に強く関連していること、②被害と仲間の受容は中学校進学の認識に脅威として関連していることが示された。

2. 分析に用いた学術論文の動向

上記19編の先行研究を概観したところ、内容は「攻撃性に関する尺度開発」「攻撃性に関わる要因」「攻撃性に対して行われる援助」に分類された(文末資料3)。

攻撃性に関する尺度開発に関する先行研究は1編(村山ら 2014)であり、子どもを対象とした定量的研究で行われ、4因子(「反芻」「問題解決」「思考逃避」「気晴らし」)で構成される反応スタイル尺度の開発を行った。

攻撃性に関わる要因に関する先行研究は11編であり、内訳は子どもを対象とした定性的研究は1

編 (Nurhaeni, et al. 2016), 子どもを対象とした定量的研究は 8 編 (Leung, et al. 2009; Renes, et al. 2009; 浜田ら 2016; 野田ら 2016; 村山ら 2017; Eskici, et al. 2019; Sorrentino, et al. 2019; Röder, et al. 2020), 大人を対象とした定性的研究は 1 編 (Jones, et al. 2014), 大人を対象とした定量的研究は 1 編 (Ilgar, et al. 2018) であった。先行研究では, 攻撃性に関わる要因として, 「対人関係と個人的なストレス」(Leung, et al. 2009), 「薬物使用のリスク」(Renes, et al. 2009), 「社会的アイデンティティ」「集団現象」(Jones, et al. 2014), 「性別違和感」(浜田ら 2016), 「学年段階」(野田ら 2016), 「家庭での子育て」(Nurhaeni, et al. 2016), 「反芻」(村山ら 2017), 「コンピューターゲーム」(Ilgar, et al. 2018), 「精神的暴力への曝露」(Eskici, et al. 2019), 「道徳的意識の欠如」「オンラインリスクの認識の低さ」「校風の悪さ」「親のサポートの少なさ」「高いピアサポート」(Sorrentino, et al. 2019), 「中学校進学における社会的能力と期待」(Röder, et al. 2020) が挙げられていた。

攻撃性に対して行われる援助に関する先行研究は 7 編であり, 内訳は子どもを対象とした定性的研究は 2 編 (Whitby, et al. 2009; Fronapfel, et al. 2018), 子どもを対象とした定量的研究は 3 編 (山井ら 2003; Daly, et al. 2009; 村山ら 2016), 大人を対象とした定性的研究は 1 編 (Çolak, et al. 2015), 子どもと大人双方を対象とした定性的研究は 1 編 (藤岡 2013) であった。先行研究では, 攻撃性に対して行われる援助として, 葛藤解決方略の提供 (山井ら 2003), 暴力的な番組の制限 (Daly, et al. 2009), ソフトウェアツールを使用した行動支援 (Whitby, et al. 2009), 対処支援プログラムの提供 (藤岡 2013), 早期介入プログラム (FSS-PSV) の提供 (Çolak, et al. 2015), ソーシャルサポートの提供 (村山ら 2016), PTR-YC プロセスの提供 (Fronapfel, et al. 2018) が挙げられていた。なお, 大人を対象とした定量的研究は見当たらなかった。

III. 結論

本研究は, 子どもの攻撃性への援助について知見

を得ることをねらいとして, 子どもの攻撃性への援助に関する国内外の学術論文について, 動向と課題を整理することを目的に行った。収集した 19 編の学術論文は「攻撃性に関する尺度開発」「攻撃性に関わる要因」「攻撃性に対して行われる援助」に分類された。

「攻撃性に関する尺度開発」は 1 編 (村山ら 2014) のみである。村山ら (2017) は, この尺度を原案として小学校高学年・中学生用情動調整尺度 (ERS-EM) を作成し, 子どもの「攻撃性に関わる要因」として, 「反芻」があることを明らかにした。

また, 「攻撃性に関わる要因に関する先行研究」は 11 編であり, 被援助者である子ども, 援助者である大人を対象とした定性的研究及び定量的研究が行われてきた。これらの先行研究 (Leung, et al. 2009; Renes, et al. 2009; Jones, et al. 2014; 浜田ら 2016; 野田ら 2016; Nurhaeni, et al. 2016; 村山ら 2017; Ilgar, et al. 2018; Eskici, et al. 2019; Sorrentino, et al. 2019; Röder, et al. 2020) では, 攻撃性に関わる要因として, 「対人関係と個人的なストレス」「薬物使用のリスク」「社会的アイデンティティ」「集団現象」「性別違和感」「学年段階」「家庭での子育て」「反芻」「コンピューターゲーム」「精神的暴力への曝露」「道徳的意識の欠如」「オンラインリスクの認識の低さ」「校風の悪さ」「親のサポートの少なさ」「高いピアサポート」「中学校進学における社会的能力と期待」が挙げられていた。

さらに, 「攻撃性に対して行われる援助に関する先行研究」は 7 編であり, 被援助者である子どもを対象とした定性的研究及び定量的研究, 援助者である大人を対象とした定性的研究が行われてきた。これらの先行研究 (山井ら 2003; Daly, et al. 2009; Whitby, et al. 2009; 藤岡 2013; Çolak, et al. 2015; 村山ら 2016; Fronapfel, et al. 2018) では, 攻撃性に対して行われる援助として, 「葛藤解決方略の提供」「暴力的な番組の制限」「ソフトウェアツールを使用した行動支援」「対処支援プログラムの提供」「早期介入プログラム (FSS-PSV) の提供」「ソーシャルサポートの提供」「PTR-YC プロセスの提供」が挙げられていた。

社会的養護が必要な児童の暴力行為への援助技法

が、未だ十分に確立されているとはいえない状況が指摘されている中（藤岡 2009）、上記に示した子どもの「攻撃性に関わる要因」「攻撃性に対して行われる援助」に着目することも、援助の一助になると考えられる。

今後の研究課題としては、以下の点が考えられる。

「攻撃性に関する尺度開発」において、不快な状態の原因と結果に対して、過剰な注目を向ける傾向を指す反芻について、どのような援助を行うことができるか研究を蓄積することが、子どもへの「攻撃性に対して行われる援助」の一助になると考えられる。

また、本研究では、ボウルビーの考えを援用し、社会的養護を必要とする児童による暴力行為の一因として、愛着対象との離別によって、内的作業モデルが内在化されず、攻撃性を見せる可能性に着目した。しかし、子どもの攻撃性への援助について、愛着が子どもの攻撃性の増減に影響を及ぼす可能性に着目した先行研究は見当たらなかった。今後は、愛着と子どもの攻撃性の関連に着目することもまた、社会的養護が必要な児童の暴力行為への援助の検討の一助になるであろう。

さらに、「攻撃性に対して行われる援助」においては、援助者である大人を対象とした定量的研究は見当たらなかった。今後は、子どもと大人、双方の福祉を守るために、大人を対象とした定性的研究とともに、定量的研究についても研究を蓄積することが喫緊の課題になるといえる。

文献

秋葉弓子 (2013) 「中高年期の攻撃性：自己愛傾向と愛着スタイルとの関連からの検討」『臨床心理学研究』11, 19-43.

浅川潔司・福井紫帆・梶原由貴・三木麻里子 (2013) 「父子関係が日本人大学生の愛着と攻撃性に与える影響」『兵庫教育大学研究紀要』43, 19-24.

Çolak, Aysun; Tomris, Gözde; Diken, Ibrahim H.; Arıkan, Arzu; Aksoy, Funda; Çelik, Seçil. (2015) Views of Teachers, Parents, and Counselors toward the Preschool Version of First Step to Success Early Intervention Program (FSS-PSV) in Preventing Antisocial Behaviors., *Educational Sciences: Theory and Practice*. 15 (3), 691-708.

Daly, Laura A.; Perez, Linda M. (2009) Exposure to Media Violence and Other Correlates of Aggressive Behavior in

Preschool Children., *Early Childhood Research & Practice*. 11 (2).

Eskici, Menekse; Tinkir, Nilüfer Saatçioğlu. (2019) Exposure to Emotional Violence: Relationship between University Students According to Their Demographic Characteristics., *Pedagogical Research*. 4 (1), em0026.

Eyasu, Nahom. (2017) Causes of Grade Nine Students' Grade Retention in General Secondary Schools of Dabat Woreda in North Gondar, Ethiopia., *International Journal of Education and Literacy Studies*. 5(2), 84-100.

Fitzpatrick, Caroline; Archambault, Isabelle; Barnett, Tracie; Pagani, Linda. (2020) Preschool Cognitive Control and Family Adversity Predict the Evolution of Classroom Engagement in Elementary School., *South African Journal of Childhood Education*. 10 (1), 803.

Fronapfel, Brigid; Dunlap, Glen; Flagtvedt, Kristen; Strain, Phillip; Lee, Janice. (2018) Prevent-Teach-Reinforce for Young Children: A Program Description and Demonstration of Implementation in an Early Childhood Setting., Fronapfel, Brigid; Dunlap, Glen; Flagtvedt, Kristen; Strain, Phillip; Lee, Janice., *Education and Treatment of Children*. 41 (2), 233-248.

藤岡孝志 (2009) 「児童養護施設における養育困難児童への対処に関する研究 — レジデンシャル・マップの活用と愛着臨床アプローチ (CAA) を通して」『日本社会事業大学研究紀要』56, 23-43.

藤岡孝志 (2013) 「児童養護施設入所児童の攻撃性への対処支援プログラムに関する研究」『日本社会事業大学研究紀要』59, 185-220.

浜田恵・伊藤大幸・片桐正敏・上宮愛・中島俊思・高柳伸哉・村山恭朗・明畛光宣・辻井正次 (2016) 「小中学生における性別違和感と抑うつ・攻撃性の関連」『発達心理学研究』27 (2), 137-147.

初塚眞喜子 (2010) 「アタッチメント (愛着) 理論から考える保育所保育のあり方」『相愛大学人間発達学研究』1, 1-16.

Housman, Donna K.; Denham, Susanne A.; Cabral, Howard. (2018) Building Young Children's Emotional Competence and Self-Regulation from Birth: The "Begin to...ECSEL" Approach., *International Journal of Emotional Education*. 10 (2), 5-25.

İlgar, Sengul Mertol; Karakurt, Cigdem. (2018) An Investigation of the Effect of Preschool Children's Computer Game Playing on Their Development and Behavior through the Lens of Turkish Mothers., *Universal Journal of Educational Research*. 6 (12), 2855-2863.

James-Burdumy, Susanne; Bleeker, Martha; Beyler, Nicholas; London, Rebecca A.; Westrich, Lisa; Stokes-Guinan, Katie;

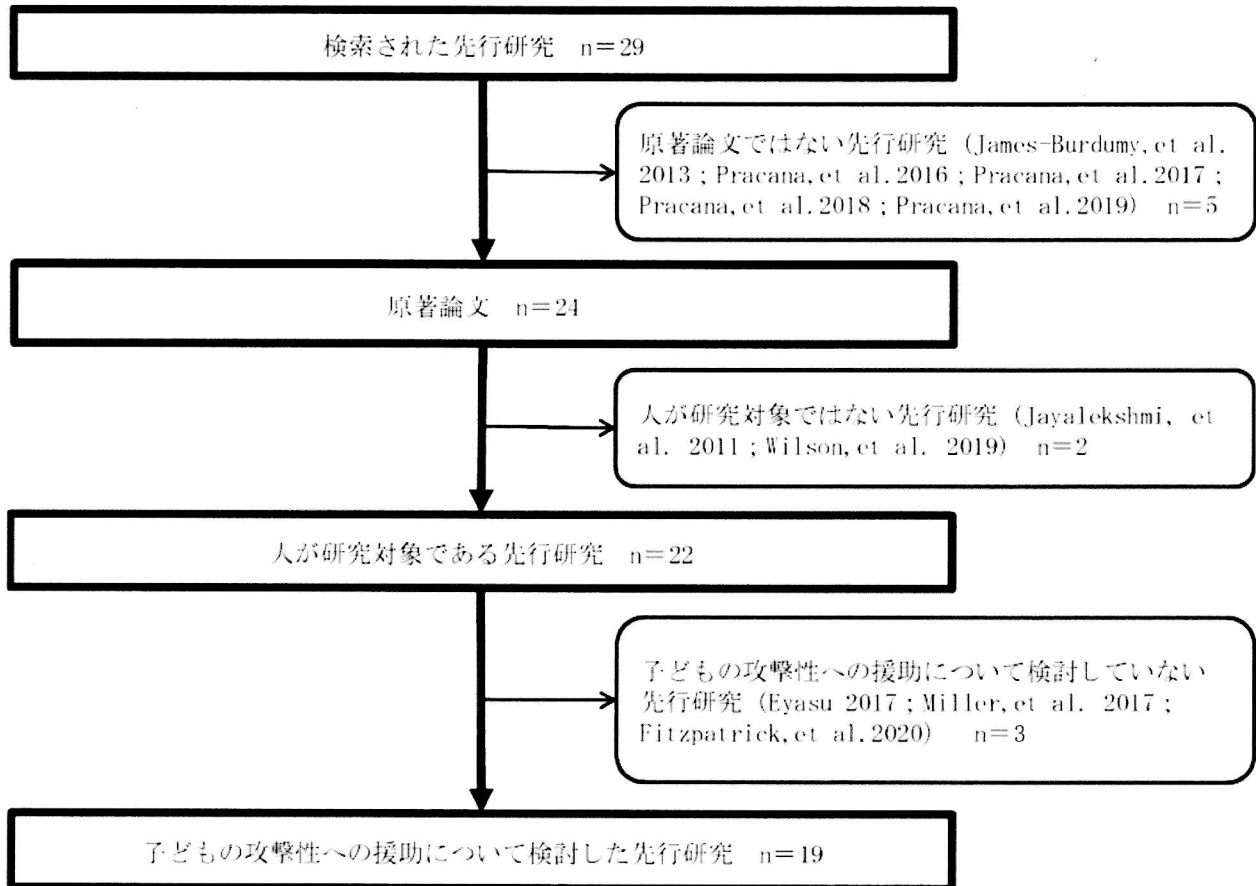
- Castrechini, Sebastian. (2013) Does Playworks Work? Findings from a Randomized Controlled Trial., Society for Research on Educational Effectiveness.
- Jayalekshmi, N. B.; Dharma Raja, B. William. (2011) Behavioural Development of Early Adolescents by Dint of Positive School Climate., *Journal on Educational Psychology*. 5(2), 1-8.
- John Bowlby (1973) *Attachment and Loss, Vol.2 Separation: The Tavistock Institute of Human Relations.* (= 1991b, 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳『母子関係の理論Ⅱ 分離不安』岩崎学術出版社.)
- John Bowlby (1982) *Attachment and Loss, Vol.1 Attachment: The Tavistock Institute of Human Relations.* (= 1991a, 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一訳『母子関係の理論Ⅰ 愛着行動』岩崎学術出版社.)
- Jones, Siân Emily; Manstead, Antony S. R.; Livingstone, Andrew G. (2014) Bullying and Belonging: Teachers' Reports of School Aggression., *Frontline Learning Research*. 2(1), 64-77.
- 小寺健太・桂田恵美子 (2020) 「攻撃性と自尊感情および愛着スタイルとの関連」『関西学院大学心理科学研究』46, 103-109.
- 小西亜実 (2014) 「青年期の愛着スタイル傾向と社会的適応性：怒りの感情と攻撃性の観点から」『臨床心理科学研究』12, 125-144.
- 厚生労働省 (2011) 「社会的養護の課題と将来像」(https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/syakaiteki_yougo/dl/08.pdf, 2021.2.20)
- 厚生労働省 (2012) 「児童養護施設等の小規模化及び家庭の養護の推進について」(https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/syakaiteki_yougo/dl/working3.pdf, 2021.2.20)
- 厚生労働省 (2016a) 「児童福祉法等の一部を改正する法律（平成28年法律第63号）の概要」(https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/03_3.pdf, 2021.2.20)
- 厚生労働省 (2016b) 「児童福祉法等の理念の明確化等」(<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/280617rinen.pdf>, 2021.2.20)
- 厚生労働省 (2017) 「新しい社会的養育ビジョン」(<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000173888>., 2021.2.20)
- 工藤晋平 (2006) 「おそれ型の愛着スタイルにおける攻撃性の抑圧－P-Fスタディを用いた検討：－P-Fスタディを用いた検討」『パーソナリティ研究』14(2), 161-170.
- 工藤晋平・梅村比丘 (2011) 「安全基地スクリプト法による愛着表象測定：予備的報告」『広島国際大学心理臨床センター紀要』8・9, 23-34.
- Leung, Chi-hung; To, Hing-kwan. (2009) The Relationship between Stress and Bullying among Secondary School Students., *New Horizons in Education*. 57(1), 33-42.
- Miller, Shauna; Smith-Bonahue, Tina; Kemple, Kristen. (2017) Preschool Teachers' Responses to Challenging Behavior: The Role of Organizational Climate in Referrals and Expulsions., *International Research in Early Childhood Education*. 8(1), 38-57.
- 村山恭朗・伊藤大幸・高柳伸哉・松本かおり・田中善大・野田航・望月直人・中島俊思・辻井正次 (2014) 「小学高学年・中学生用反応スタイル尺度の開発」『発達心理科学研究』25(4), 477-488.
- 村山恭朗・明翫光宣・辻井正次・伊藤大幸・大嶽さと子・片桐正敏・浜田恵・中島俊思・上宮愛・野村和代・高柳伸哉 (2016) 「小中学生におけるメンタルヘルスに対するソーシャルサポートの横断的効果」『発達心理科学研究』27(4), 395-407.
- 村山恭朗・伊藤大幸・高柳伸哉・上宮愛・中島俊思・片桐正敏・浜田恵・明翫光宣・辻井正次 (2017) 「小学校高学年児童および中学生における情動調整方略と抑うつ・攻撃性との関連」『教育心理科学研究』65(1), 64-76.
- 丹羽智美 (2011) 「親への愛着による親子のストレス場面に対する評価の差異：図版に対する反応からの検討」『子ども未来学研究』6, 69-80.
- 野田航・辻井正次・伊藤大幸・浜田恵・上宮愛・片桐正敏・高柳伸哉・中島俊思・村山恭朗・明翫光宣 (2016) 「小・中学生の攻撃性はどの程度安定しているか：潜在特性・状態モデルを用いたコホートデータの多母集団同時分析」『発達心理科学研究』27(2), 158-166.
- Nurhaeni, Heni; Dinarti; Priharti, Dwi. (2016) The Family Parenting Influenced Adolescent Brawls Behavior., *International Journal of Evaluation and Research in Education*. 5(2), 126-134.
- 大橋良枝 (2017) 「知的特別支援学校の混乱に対する臨床介入モデルの精神的分析的検討(1)愛着障害児の投影性同一化と教師の孤立」『聖学院大学論叢』30(1), 65-81.
- 岡田博名・桂田恵美子 (2013) 「なぜ人は攻撃するのか：攻撃性と愛着スタイル及び防衛機制との関連」『関西学院大学心理科学研究』39, 37-42.
- 尾崎康子・杉本宜子 (2007) 「青年期における愛着と攻撃性との関連」『富山大学人間発達科学部紀要』2(1), 37-45.
- Pracana, Clara, Ed.; Wang, Michael, Ed. (2016) *International Psychological Applications Conference and Trends (InPACT) 2016.*, Online Submission.
- Pracana, Clara, Ed.; Wang, Michael, Ed. (2017) *International Psychological Applications Conference and Trends (InPACT) 2017.*, Online Submission.

- Pracana, Clara, Ed.; Wang, Michael, Ed. (2018) Psychological Applications and Trends 2018., Online Submission.
- Pracana, Clara, Ed.; Wang, Michael, Ed. (2019) Psychological Applications and Trends 2019., Online Submission.
- Renes, Susan L.; Strange, Anthony T. (2009) Factors Affecting Drug Abuse in Adolescent Females in Rural Communities., *Journal of School Counseling*. 7(41).
- Röder, Mandy; Müller, Anna Rebecca. (2020) Social Competencies and Expectations Regarding the Impending Transition to Secondary School., *International Journal of Educational Psychology*. 9 (1), 82-102.
- 下笠幸信 (2004) 「被虐待児のプレイセラピーにおける攻撃と依存」『臨床教育心理学研究』30(1), 71-80.
- Sorrentino, Anna; Farrington, David P. (2019) Individual, Family, Peer, and School Risk Factors for Teacher Victimization., *Educational Sciences: Theory and Practice*. 19 (4), 1-13.
- 東京都社会福祉協議会児童部会 (2009) 「『児童養護施設における児童の暴力問題に関する調査』報告」『東京都社会福祉協議会児童部会紀要』平成 19 年度版, 43-53.
- Whitby, Peggy; Miller, Kevin J. (2009) Using eKidtools Software Tools to Provide Behavior Support in General Education Settings., *TEACHING Exceptional Children Plus*. 5 (3).
- Wilson, Tiffany; Maloney, Matthew. (2019) Dating Violence in Adolescent Relationships., *International Journal of the Whole Child*. 4 (2), 82-87.
- 山井絵里奈・成田健一 (2003) 「葛藤の表現からみた子どもの信頼感：児童期の対人葛藤場面における葛藤解決方略と信頼感・攻撃性の関連」『東京学芸大学紀要 第1部門 教育科学』54, 137-147.
- 吉村美由紀 (2014) 「児童養護施設における施設内暴力に関する研究：子どもから職員への暴力の背景と対応過程に視点を置いて」『名古屋芸術大学研究紀要』35, 383-398.

文末資料

文末資料 1 分析に必要な学術論文の選定の流れ

分析に必要な学術論文の選定を行った表を以下に記す。



文末資料 2 子どもの攻撃性への援助について検討している学術論文

選択した 19 編の先行研究について、「対象」「方法」「内容」別に整理した表を以下に記す。

番号	筆者	対象	方法	内容
1	山井ら (2003)	小学 5・6 年生 302 名	アンケート 調査	対人葛藤場面での葛藤解決方略と攻撃性の関連を調べ、適応的な葛藤解決方略について検討した。この結果、攻撃性が高い子どもは、①自己と他者を信頼しているにもかかわらず、対人葛藤場面において「対決」パターンを取りやすいこと、②「怒り」感情をコントロールするスキルを教えること、③「怒り」のみならず「敵意」を持っている可能性が高いこと、④児童期に攻撃的であるという行動特徴が、思春期以降の非行、あるいは仲間からの孤立からくる抑うつ感の増大等、様々な不適応症状に関連していく可能性があることが示された。
2	Daly, et al. (2009) アメリカ	就学前児童 70 名	アンケート 調査	就学前児童の遊び行動と、テレビの暴力および規制状況との関係を検討した。この結果、①暴力的な番組の量を制限すること、②子どもたちが双方向の規制支援の恩恵を受けていることが示された。
3	Leung, et al. (2009) 香港	中学生 340 名	アンケート 調査	学生のストレスといじめの関係を検討した。この結果、①家族の中で女子生徒は男子生徒よりもストレスを感じる、②男子生徒よりも女子生徒の方が社会的いじめを行っている、③対人関係と個人的なストレスの両方がいじめにつながる要因となることが示された。
4	Renes, et al. (2009) アメリカ	女子中学生 98 名	アンケート 調査	農村地域の青年期女性における薬物乱用に影響を与える要因について検討した。この結果、攻撃的な行動を示す青年期初期の女性は、薬物使用のリスクが高いことが示された。
5	Whitby, et al. (2009) アメリカ	障害のある小学 3 年生 1 名	事例研究	ソフトウェアプログラムである eKidTools を使用して、一般的な教育環境において、障害を持つ児童の社会的および感情的なニーズに対応する介入プログラムを設計する方法について検討した。この結果、ソフトウェアプログラムである eKidTools を使用することによって、①自己管理スキルを獲得したこと、②ニーズを満たすために必要なサポートを獲得したことが示された。
6	藤岡 (2013)	児童養護施設入所児童 91 名及び児童養護施設職員 (研究 I) 児童養護施設の入所児童 80 名及び児童養護施設職員 (研究 II)	観察調査	虐待を受けた子どもたちに見られる攻撃的行動に対する対処のために、子どもたちの感情調整や養育者との関係構築をプログラムの中に取り入れている包括的養育者 - 子ども関係性構築プログラムが有効であるのかどうかを検証した。この結果、①自己発現的な攻撃性、及び反応性の攻撃性に対する情動調整では、重要な人物との関係性構築が大切であること、②攻撃行動の「選択」の前に、重要な人物との心地よさ体験、重要な人物との信頼体験が出現し、攻撃性の調整が行われることが示された。
7	Jones, et al. (2014) イギリス	小学校教諭 13 名、中学校教諭 35 名 (3 人は不明)、合計 51 名	自由回答 式の質問 紙調査	教師から提供されたいじめの定性的報告におけるグループプロセスを検討した。この結果、①いじめを支持または抵抗するために、子どもたちが社会的アイデンティティのプロセスに沿って特定の方法で行動すること、②いじめは集団現象であると教師が理解していることが示された。
8	村山ら (2017)	小学 4 年生から 中学 3 年生の 5,217 名	アンケート 調査	小学高学年・中学生用反応スタイル尺度を開発した。因子分析の結果、小学高学年・中学生用反応スタイル尺度は 4 因子 (「反芻」「問題解決」「思考逃避」「気晴らし」) で構成されることが示された。

番号	筆者	対象	方法	内容
9	Çolak, et al. (2015) トルコ	幼稚園教諭 11 名, 保護者 11 名, FSS-PSV カウンセラー 6 名	半構造化面接	反社会的行動の防止における早期介入プログラム (FSS-PSV) に対する教師, 保護者, カウンセラーの見解を説明した。この結果, ①反社会的/問題行動は, 社会的スキルにおける身体的攻撃性と機能不全を含んでいること, ②教師と保護者の大多数は, 反社会的/問題行動は家族関係に理由があること, ③教師は, 生徒に反社会的/問題行動について話し, 前向きな行動に対して報酬を与えることを好むこと, ④親は子どもと話すか, 罰することを好むことが示された。
10	浜田ら (2016)	小学校 4 年生から中学校 3 年生までの 5,204 名	アンケート調査	小学生および中学生における性別違和感を測定するための尺度を開発し, 性別違和感が示す, 内在化問題および外在化問題との関連について検討した。この結果, ①性別違和感と抑うつおよび攻撃性には中程度の正の相関があること, ②中学生男子において性別違和感が高い場合には, 中学生女子・小学生男子・小学生女子と比較して抑うつが高いことが示された。
11	村山ら (2016)	児童 (4~6 年生) と中学生 5,223 名	アンケート調査	メンタルヘルス問題 (抑うつ症状と攻撃性) に対するソーシャルサポートの横断的効果を検証した。この結果, ①友人および大人からのソーシャルサポートを知覚する児童生徒ほど抑うつ症状が低いこと, ②男子よりも女子でサポートと抑うつ症状の関連が強いこと, ③攻撃性については, 友人からのサポートは負の効果を示したが, その効果は非常に低いものであったこと, ④大人からのサポートは攻撃性に有意な効果を示さなかったこと, ⑤ソーシャルサポートの性差について, 女子の方が男子よりも高かったこと, ⑥学年の影響について, 学年の上昇に伴って, 友人からのサポートは増大する一方で, 大人からのサポートは減少することが示された。
12	野田ら (2016)	小学 3 年生から中学 3 年生男子 1,279 名および女子 1,187 名	アンケート調査	小・中学生の攻撃性の安定性に関して検討した。この結果, ①攻撃性は特性 - 状態モデルの適合が最も良好であり, 特性変数と自己回帰的な状況変数の双方が攻撃性の程度を規定していること, ②攻撃性は中程度の安定性をもつこと, ③攻撃性は, 学年段階が上がるにつれて上昇すること, ④小学校中学年頃までは攻撃性の個人差はまだそれほど安定的ではないが, 思春期に移行する小学校高学年頃から中学校にかけて個人差が固定化していくことが示された。
13	Nurhaeni, et al. (2016) インドネシア	高校生 108 名	観察研究	家庭の子育てが, 青年期の暴力行為に与える影響について検討した。この結果, 家庭での厳格な子育てを受けた場合, 青年期の暴力行動が低くなる傾向があることが示された。
14	村山ら (2017)	小学 4 年生から中学 3 年生までの 5,321 名	アンケート調査	情動調整方略と抑うつおよび攻撃性の関連を検証した。この結果, ①情動調整方略と抑うつおよび攻撃性の関連については, 反芻が強い児童生徒ほど抑うつと攻撃性が高いこと, ②問題解決の傾向が高い児童生徒ほど抑うつと攻撃性が低いこと, ③気晴らしを行う児童生徒ほど抑うつが低いことが示された。

番号	筆者	対象	方法	内容
15	Fronapfel, et al. (2018) アメリカ	4歳の自閉症児1名	事例研究	学習や社会的発達を妨げる挑戦的行動を行う子どものニーズを満たすように設計された、幼児のための予防-教育-強化 (PTR-YC) について検討した。この結果、学校を拠点とするチームによって実施された PTR-YC プロセスを示し、手順の有効性が示された。
16	Ilgar, et al. (2018) トルコ	幼稚園児の母親 749 名	アンケート調査	未就学児の母親が子どもの発達と行動に及ぼすコンピューターゲームの影響に関して抱く考えについて検討した。この結果、①コンピューターゲーム依存を引き起こす、②子どもの行動に悪影響を及ぼす等が示された。
17	Eskici, et al. (2019) トルコ	大学生 701 名	アンケート調査	大学生の精神的暴力への曝露のレベルと、大学生の年齢、性別、大学の前後で心理的支援を受けるか等について検討した。この結果、①大学生の精神的暴力への曝露レベルは低いこと、②男子生徒の精神的暴力への曝露は女子生徒よりも有意に高いこと等が示された。
18	Sorrentino, et al. (2019) イタリア	イタリア人学生 (11～19 歳) 251 名	アンケート調査	共感、道徳的意識、仲間と親のサポート、オンラインリスクの認識、校風等、個人および対人のリスク要因が教師へのいじめに与える影響を分析した。この結果、女子学生では、①道徳的意識の欠如、②オンラインリスクの認識の低さ、③校風の悪さ、男子学生では、①親のサポートの少なさ、②高いピアサポート、③道徳意識の欠如、④オンラインリスクの認識の低さがリスク要因であることが示された。
19	Röder, et al. (2020) ドイツ	小学校 4 年生 144 名	アンケート調査	中学校進学に関する子どもたちの期待を分析し、社会的能力、攻撃的行動、仲間の受け入れ、被害の経験が中学校進学に関する期待とどのように関連しているかを調査した。この結果、①共感と攻撃性が中学校進学の認識に強く関連していること、②被害と仲間の受容は中学校進学の認識に脅威として関連していることが示された。

文末資料 3 子どもの攻撃性への援助に関する研究動向
選択した 19 編の先行研究の動向について整理した表を以下に記す。

番号	筆者	対象		方法		内容		
		子ども (被援助者)	大人 (援助者)	定性的 研究	定量的 研究	攻撃性に関する尺度 開発	攻撃性に関わる要因	攻撃性に対して 行われる援助
1	山井ら (2003)	○			○			○
2	Daly, et al. (2009)	○			○			○
3	Leung, et al. (2009)	○			○		○	
4	Renes, et al. (2009)	○			○		○	
5	Whitby, et al. (2009)	○		○				○
6	藤岡 (2013)	○	○	○				○
7	Jones, et al. (2014)		○	○			○	
8	村山ら (2014)	○			○	○		
9	Çolak, et al. (2015)		○	○				○
10	浜田ら (2016)	○			○		○	
11	村山ら (2016)	○			○			○
12	野田ら (2016)	○			○		○	
13	Nurhaeni, et al. (2016)	○		○			○	
14	村山ら (2017)	○			○		○	
15	Fronapfel, et al. (2018)	○		○				○
16	Ilgar, et al. (2018)		○		○		○	
17	Eskici, et al. (2019)	○			○		○	
18	Sorrentino, et al. (2019)	○			○		○	
19	Röder, et al. (2020)	○			○		○	

Trends and issues of studies on the support for aggression in children

Yuko INOUE

In this study, I take up both domestic and foreign papers on the support for aggression in children, and intended to grasp trends and issues of studies on them. I performed searches in two databases, “CiNi” and “ERIC”. I paid attention to subject, method and content of nineteen papers on the support for aggression in children, and organized the research trends. I categorized nineteen papers into “development of Scales for aggression”, “factors related to aggression” and “support provided for aggression”. As a result, they were mentioned factors related to aggression include “interpersonal stress”, “personal stress”, “risk for substance use”, “social identity”, “group phenomenon”, “feeling of gender dysphoria”, “grade level”, “strict upbringing at home”, “rumination”, “computer game”, “exposure to emotional violence”, “high moral disengagement”, “low awareness of online risks”, “poor school climate”, “low parental support”, “high peer support” and “social competencies and expectations regarding the impending transition to secondary school” in previous studies. And they were mentioned support provided for aggression include “provision of the conflict resolution strategy”, “limitation on the amount of violent programming”, “behavioral support using software tools”, “provision of the Inclusive Caregiver-Child Relation Construction Program for Aggressive Children in Child Welfare Facilities”, “provision of the Preschool Version of First Step to Success Early Intervention Program (FSS-PSV)”, “provision of social support” and “provision of the Prevent-Teach-Reinforce for Young Children (PTR-YC)” in previous studies. As research issues in the future, I think that we need to accumulate knowledge regarding “the Support for aggression based on factors related to aggression”, “consideration of support focusing on the relationship between attachment and aggression of children” and “quantitative research on support for aggression by supporters”.

Keyword : literature research , child , attachment , aggression , support